

序　言

館長 渡名喜 明

「スンカン・マカイ」を知っている方も、今では少なくなっているかもしれない。使ったことがあるとなると、もっと数は減るだろう。型を使ってコバルトで絵付けした磁器碗である。南風原文化センターの2階展示室には、沖縄戦の避難壕から出土した戦争資料が展示されているが、その中にも戦中壺屋でつくった「兵隊茶碗」と並んで、このスンカン・マカイが見られる。

「マカイ」は碗のことだが、「スンカン」は何だろう。あるいは、広辞苑にある「しゅんかん（筍干）：②食器の一種。形は飯茶碗より大きく、羹（あつもの）または飯を盛るのに用い、羹は木製の塗物を用いる」とされる言葉のなまつものかもしれない。

いずれにせよ、本土産の磁器であるが、いつ・どこで生産されて沖縄に移入されたのか、明治以降で産地は愛媛県の砥部だろうとか、いや他の産地も考えられる、などの議論はあったが、それ以上ではなかったような気がする。

その意味で、砥部の現地を訪れて資料を実見し、聞き取り調査の結果を踏まえたうえで、沖縄県内出土の資料と比較しようという宮城弘樹氏の論考は、きわめて興味深い。玉稿の寄稿にお礼を申しあげたい。

一方、学芸員内間靖のレポートは、アラヤチの壺に記されている「ハン（判）」について、当館収蔵資料から拓本をとり、紹介したものである。壺屋のアラヤチ職人石川喜進氏等による雑誌『やちむん』第11号所載の「壺屋の屋号と判（ハン）について」（1992.12）をベースにその補足調査を試みたものである。遺跡の調査報告にも図版の掲載が見られるが、関係者によるデータ交換やデータベース作成につながれば、壺屋焼研究の進展に寄与できるだろう。

学芸員赤嶺由紀子のレポートは、今年度文部科学省の助成を受けて実施した「出前子ども博物館」事業の報告である。詳細は今年度刊行される『平成13年度出前こども博物館報告書』を参照願いたいが、「待ちの博物館」ではなく、「行動する博物館」でありたい、とする当館の姿勢の一端を示せたと思う。